

神戸市聴覚障害者福祉施設建設推進委員会 拡大学習会

2016 年 4 月 2 日（土）13：20～ 三宮勤労会館 3 階 308 号室

志藤修史氏（大谷大学文学部社会学科教授）講演

「実態調査から求められている事業について①」

～ろう成人・中途失聴者難聴者～

皆さま、こんにちは。大谷大学の志藤です。3 年前の 2013 年の実態調査に関わらせていただきました。その時にはたくさんの方々のご協力をいただき、またいろいろと教えていただきまして、深く感謝しています。今日その時の結果に基づいたひとつの願いであるろうあハウスを含めた活動の拠点に向けた取組に、このような形でまたかかわれること嬉しく思います。

昨日 4 月 1 日からは障害者の差別解消法がスタートしました。僕の住んでいる京都市では 3 月 25 日に手話言語条例が通りました。昨年京都府城陽市でも同じく条例が出されていまして、紙の上では一步步進んでいると感じています。けれども現実、聴覚障害者の生活はどうかというと、そう簡単には改善されていません。日々の生活状況は厳しい。施設、サービスを利用しても自分たちの生活はなかなか安定しないという声も聞いております。とは言っても、一步步進んでいる内容を我々もきちんと捉えて、実態が進むように手をつないで頑張っていかなければならないと思っています。

●2013 年取り組んだ実態調査結果から

今日は「実態調査から求められている事業」ということで、実態調査の結果からみなさんに報告をしたいと思います。特に今日は「何が」求められているのか、「何故」それが求められているのか、この二つのことを報告したいと思います。調査をした時には、兵庫県全体で約 1000 人の方に答えていただきましたが、今日は神戸だけを切り取って報告しようと思っています。

●神戸市の仲間は何を求めているのか！

資料 1 枚目めくっていただきますと、「神戸市の仲間は何を求めているのか！」というグラフがあります。これはアンケートで「これからどういうサービスが必要だと思われますか？」という問に対する答えです。線が 2 本あります。左が兵庫県全体、右が神戸市の方の回答です。見ていただいたらわかるように、神戸市民の方が、施設がほしい、サービスが必要だという割合が高いです。兵庫県より神戸市の方がより切実にサービスがほしいと答えられています。

ではどのようなサービスがほしいのか。一番多いのはコミュニケーションが保障された身近な施設。自分たちが住んでいる近くにコミュニケーションが保障された施設がほしいと一番目に答えています。実に64%の方が答えています。2番目に高かったのは、「災害の時にもきこえの配慮があり、安心して避難生活ができる施設」、これが半分以上。非常に高いですね。半数以上の方が、身近なところで、かつ災害が起きても安心できる施設を望んでおられるということです。

その次は高齢者のデイサービス。気軽に集まれる場。「気軽」というところがすごく大事ですね。災害のことが学べる場。ヘルパー派遣制度。誰でも利用できる喫茶・レストラン。長期生活施設。このあたりまで3人に一人以上が答えているということ。

このように兵庫県全体の中でも、特に神戸の方は特に施設が必要、身近なところに必要、安心して利用できる施設が必要と答えていることがよくわかります。

●いざというときのコミュニケーションで困っている

では、なぜこのような施設が必要だと答えているのかを見ていきたい。

一つには、いざというときのコミュニケーションに日々困っている、ということです。毎日、日々の生活でも困っているんですが、でもいざというときのコミュニケーションで困っていると答えているのです。

ではどういう内容が多いか。テレビはいつも見ておられるので、当然字幕は必要ですよ。次に災害の時の情報、避難方法がわからないということです。神戸は今から21年前に大きな地震が起きました。昨日も大きな地震が起きましたね。携帯に入ってビックリされたと思います。それにもかかわらず、避難の方法や災害の情報が不安だと答えている方がなんと6割弱もいる。あとは病院、110番や119番です。

いざというときにコミュニケーションがなかなかとれなくて困ると答えておられる。でもいざというときに困るということは日常的にも困っているということです。ですから、先ほどの話、身近なところというのは、いざというときに困るので、やはり日頃からつながりがほしい。日頃から安心して、顔が見えて、きちんとコミュニケーションがとれる場が欲しいと思っておられるということです。

●くらはは厳しく健康や一人の時は不安

コミュニケーションで困っておられるということの背景、生活状況はどうかということです。病気、家族の病気、これが高い。日頃生活していて病気

になったらどうしたらいいのか。もう一つ高いのは、家に一人でいるときに何かあったらどうしたらいいのでしょうか。みんな困っているんですね。こういう不安をどうして解消したらいいのか、と考えたら、気軽に相談できる人がほしい。どうも最近調子が悪い、具合が悪い。誰かに相談したい。話を聞きたい。でも集まれる場がなかったらそういう話もできないですね。家に一人でいると不安。最近変な電話がかかってくる、変なファックスが来る。何だろう。身近なところに仲間がいたら、「あなたはどうか」と聞き合える。それがなかったら一人で不安なまま。ですから日頃の暮らしの不安とか、いざというときのコミュニケーションの方法は、日頃から皆が集まれる場があれば、かなり解消できるということになります。

●増やせる→必要とされている、いざという時の頼りにする方との出会いの場

今現在は、皆さんはだれに相談しているのでしょうか。これは兵庫県全体と神戸もあまり変わらないのですが、神戸が全体より低いのは、知人や友人。これが兵庫県全体に比べ低い。なぜか。集まって、顔を合わせて言い合うことがなかなかできにくい状況が神戸にあるのではないかと考えています。頼りにしているのは「加入している聴覚障害者団体」。仲間が一番頼りになるということですね。次に手話通訳。普通は身内が多いのですが、神戸は近所の人というのも高いですね。でも近所の人というのは、実は手話通訳や団体の人なんですね。近所の人とは誰ですか？と個別に聞いてみると、通訳の人との答え。それ以外の方もおられるかもしれませんが、調査では、隣近所との関係は難しい、と答えておられる。どちらかというと近所に住んでいる手話通訳者、ろうあ協会や難聴協会の仲間ということです。

ではこれからいざという時に頼りにできる身近な人を増やすことはできるのでしょうか。それはここに書いていますが、これからまだまだ増やせます。どうやって増やすかという、日常からの出会いの場を作ればいい。いざというとき頼りにしている人が3割、近所の人も35%、割と高いんですが、もっともっと日頃から頼りあえる仲間を増やして、その人をいざというときに頼りにできる人にしてしていけると考えています。

●増やせる→必要とされている人を介した生きた情報の拠点

増やしていけるものはもう一つあります。それは人を介した情報。必要な情報は誰から手に入れますかと聞いたら、多くの人ができれば信頼できる人、仲間から情報を得たいと思っておられる。ところが今は残念ながら、加入している団体、手話サークルのところは高いんですが、それ以外のところはあまり高くない。これは兵聴協、福祉事務所、神戸ろうあ協会、尼崎ろうあ協会、要す

るに施設の職員、サービスを提供する専門の人が情報提供としてはまだまだ足りない。生活状況がだんだん厳しくなれば専門的な様々な相談がしたいと思う。そのときに誰に相談すればいいか。身近なところに専門職がまだまだ足りないですね。身近なところに顔が見えて、信頼がおけて、いろんな専門的な相談に乗ってくれる人が必要。これはもっともっと増やしていけるということですね。

●利用すれば・利用できれば→広がる！

サービスを利用してどういうことを感じているのかということ聞いてみました。専門の方、顔が見える関係でいろんな相談に乗ってくれる方が少ないと言いましたね。けれども利用されている方は、そういうところに行く情報がたくさん入るようになった。いろいろ学ぶことができた。気兼ねなく話せるようになった。様々な制度を知った。このように答えておられます。サービスや制度を利用して情報をもらったりするとこのように信頼関係が広がっていきます。

でも一番大事なことは次のこと。人として尊重されていると感じた。これが一番大事なことだと思っています。神戸の場合は32%の方が、サービスを利用して、人として尊重されていると感じたと答えている。制度を知る、学ぶことは大事だが、人として尊重されていると感じるようなサービスができる、これが非常に大事なことです。これは拠点づくりの次の課題ですが、施設を作った、拠点を作った、そこで何を作っていくのか、何を進めていくのかを考えたときに、人として尊重されていると感じられるサービスや施設を作っていかなければならない。中身作りの話です。

●活動は広がる余地がある—つくる運動は未知数

とはいうものの、施設づくりは一步一步進んでいます。このアンケートは3年前に取ったものですが、僕は、運動はもっともっと広がると思います。

これを見ると、施設づくり・作業所作りの活動に参加している人が神戸はゼロだったんですね、3年前は。今は違うと思います。兵庫全体は3.7%、これもまだまだ低いと思います。けれども、神戸の方は、ここ空白になっていますよね。ここをもっと増やしていく可能性がある。今回難聴協が少し低かったのですが、手話サークルやろうあ協会などいろんな活動に参加されていますけれど、施設を作ろうという活動は神戸ではこれからです。みなさんどんどん頑張らないといけない。

●大切なことは→「必要性」と声かけ・誘い

最後に、運動を広げていくのに必要なことは何か。大切なことはなぜ施設が

必要なのか、なぜ拠点が必要なのかという必要性をきちんと訴えていくことがまず大事。最初のデータにもあったように神戸市の人欲しいと思っている。けれども運動はまだしていない。「欲しいと思うならやろうよ！必要でしょ。」と声をかけていくことが大事。なぜならこれは活動に参加していない人の統計です。忙しくて時間がないとか、声をかけても忙しいから参加しないと思っておられるかもしれませんが、そんなことはないです。大きいのは情報が届いていない。こんなことが必要だよ、今こんなことをやろうと思っているよ、という情報がまだまだ届いていない。兵庫県全体の中でも神戸は割合が高い。

もう一つ、情報が届かないから興味がわからないんですね。興味が無い、これも高い。あと参加したいものがない。誘われない。遠い、というのもある。誘われないのはだめ。みんな声をかけないといけない。みんな待っておられるんですね。自分たちの今後を考えて、何かできることないかなと待っている。面白そうだ、と興味がわいたら、情報保障はありますので、絶対に参加される。

施設づくりの運動はまだまだ未知数だが、必要だと求めている。それを誘っていったらいい。みなさん方一人ひとりがみんなで集めたこの統計は、これからの私たちのやるべきことをきちんと示しているんです。確信を持ってやっていきましょう！ということで私の話は終わります。